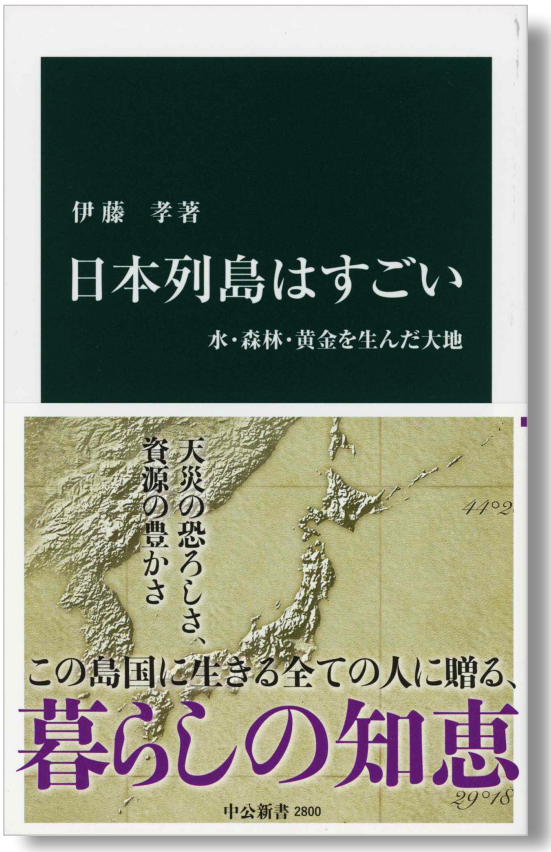
書籍紹介

日本列島はすごい
水・森林・黄金を生んだ大地
（中公新書 2800）

伊藤　孝［著］



中央公論新社
発売日：2024 月 4 月 25 日
定価：920 円（税別）
ISBN：978-4-12-102800-6
10.9 cm x 17.3 cm x 1.5 cm，並製
240 ページ

今春 4 月 25 日に，中央公論新社からは珍しく，地球科学に関する新書が出版された．タイトルは「日本列島はすごい」というやや漠然とした主題が付けられていた．おそらく，日本列島の「すごい」ところが，副題に示す「水・森林・黄金を生んだ大地」にあることを著者は示したいのかと読書前には考えていた．但し，この新書で著者の意図する「すごい」の意味が，「素晴らしい！」という positive な意味なのか？「恐ろしい！」という negative な意味なのか？はたまた両方の意味なのか？については，完読するまで私には不明であった．

この新書の内容について，地質学者の視点から少しだけ解説を付け加えるならば，本書は日本列島の現状と成立過程に焦点をあてた一般的な地球科学分野の普及書の範疇にある．しかも，その記述の多くは高校地学で取り扱う範囲内にあると記されている．但し，地球科学分野の記述を基本に据えながらも，本書は歴史学・考古学など文理の学際分野にまで及んでおり，この点では中央公論新社の新書らしくも感じた．おそらく，著者である伊藤　孝さんご自身が，長年担当されてきた茨城大学の教養課程の地学基礎などの講義の一部を，新書としてとりまとめられたものなのであろう．

1 万 4 千の島々が連なる日本列島は，ユーラシア大陸東縁部で付加体としてその地盤が形成され，1 億年前には陸弧となった．2300 万年前に大陸の東縁部に亀裂ができはじめ，1500 万年前に縁海（日本海）が開口して大陸から離脱し島弧となった．3 万 8 千年前の最終氷期に干上がった海峡を渡って初めてホモ・サピエンス（旧石器人）が列島に上陸し，それ以降，大陸との交流を行いながら列島の住民として歴史を紡いできた．列島を特徴付ける四季の変化に富んだ湿潤な気候は，国土を潤し，森を育み，豊かな資源を生み出してきた．本書は，日本列島の成り立ちを俯瞰的に捉え，水・森林・黄金が織りなした日本列島の自然史を，時空を越えて，伊藤さん独自の切り口で優しく丁寧に解説している．

著者である伊藤さんは宮城県のご出身であり，その後，山形大学から筑波大学大学院を経て茨城大学の教員に採用され，現在，茨城大学教育学部の教授の要職にある．2005 ～ 2012 年には，NHK の E テレで放映されていた高校講座「地学」番組講師を担当されていたが，この番組をご覧になられた読者も多いかと思う．

私が彼と最初にお会いしたのは今から 20 年程前の小川勇二郎先生（現，筑波大学名誉教授）が主催されたホームパーティーの場であったと記憶している．その後も，彼の上司であった牧野泰彦先生を補佐する日本堆積学会の執行委員として，度々一緒に仕事をする機会があった．近しい関係になってからは，彼のゼミの学生を指導する機会や私

が茨城大学で講義をする機会を与えてくださった．私の脳裏には，未だ当時の学生とのよき思い出が鮮明に残っている．また，今から10年程前に，彼が九州大学大学院理学研究院の清川昌一さんたちと一緒に岩波書店から出版された「地球全史スーパー年表」について，GSJ地質ニュースの読者向けに紹介記事を執筆したこともある（七山，2015）．この年表で考案されたレンズの考え方（時間スケールを変えながら地球史を俯瞰する方法）については，この新書の記述にも度々登場するので，その考え方を事前に理解しておくとよいかも知れない．

伊藤さんは産総研地質調査総合センターとも少なからず所縁のある方である．彼の筑波大学の院生時代の研究テーマは，海底マンガン鉱床の成因をSr同位体からアプローチする鉱床学であり，その研究成果で学位を取得された．その当時は，旧地質調査所海洋地質部の臼井　朗さん（現，高知大学）や川幡穂高さん（現，早稲田大学）の研究室に出入りしていたとお聞きしたことがある．茨城大学に就職されてからは，専門の鉱床学と並行して，新たな主戦場となった地学教育分野でのご活躍も目覚ましく，前任の牧野先生の後継者として，この分野でのリーダー的な存在となられている．

私から見て彼の書いた文章は，穏やかで，時にユーモアに富んでおり，たいへん親しみやすく思える．それは，おそらく長年に渡る小中学校の教諭を育てる教育学部の教員として培われたスキルの一つなのであろう．この新書でも，各章の冒頭ごとに趣向を凝らした読者を引き込むような導入があり，その後，本題のテーマへと展開していく．この際，誰もがよく知る古典や小説等が使用され親しみやすさを演出している．例えば，本書の前半では江戸時代前期の俳人であった松尾芭蕉の「おくのほそ道」で巡った奥州～北陸道のルートを巧みに重ね合わせて，東北地方の地質や地形を語られている．この文章は，文系である日本史と理系である地質学をつなぐ効果的な役割を果たしているように思える．特に，出羽山地を横断し日本海に流下する最上川や最上峡，「おくのほそ道」最北の地である日本海の象潟（きさかた）海岸あたりの描写については，彼の山形大学時代のフィールド経験が生かされているのだとも想像する．

本書の目次は，以下の通りである．

まえがき
（序章）日本列島の見方　1 旅のはじめに／2 基盤となる地球科学的な情報／3 地球科学的な時間の感覚
（第1章）かたち—1万4000の島々の連なり　1 細長い列島／2 なぜ地球には陸があるのか
（第2章）成り立ち　1 独立まで／2 独立のあと
（第3章）火山の列島—お国柄を決めるもう一つの水　1 もう一つの水／2 水を客観視する／3 温泉のお湯はどこから来るのか？／4 日本列島に活火山が存在する背景
（第4章）大陸の東，大洋の西—湿った列島　1 回転する球の表面を流れる大気／2 大洋と大陸が存在する惑星の大気循環／3 大気と海洋のつながり／4「大陸の東，大洋の西」の気候
（第5章）塩の道—列島の調味料　1 昔話で描かれた塩／2 海の水はなぜ塩辛いのか／3 塩の地層／4 日本列島の塩
（第6章）森林・石炭・石油　1 火のちから／2 火のある地球と火のない地球／3 列島の森林／4 湿った大陸からの遺産—「黒いダイヤ」石炭／5 奈良時代，日本は産油国だった
（第7章）元祖「産業のコメ」—列島の鉄　1 日本列島の鉄資源／2 地球の鉄／3 縞々の鉄—縞状鉄鉱層／4 和鉄のふるさと
（第8章）黄金の日々—列島の「錬金術」　1 金との出会い／2 大陸から相続した遺産—陸奥の砂金／3 自立の旅への餞別—佐渡金山／4 自立し真のジパングへ—菱刈金山
（終章）暮らしの場としての日本列島　1 鹿沼土の上で暮らしてみたい／2「揺れる国」での経験／3 日本列島で暮らすということ
あとがき

巻末には，4ページの主要参考文献＋初出一覧および4ページの図版・データ出典が添付されている．この種の一般普及書で，引用した図面の出展をきちんと整理して示している点からも，著者の律儀な性格が垣間見える．

序章では，この新書を読み解く上での地球科学的な情報を示している．その際，伊藤さんが読者に求めているのは，上述したとおり高校地学教科書で扱う程度の知識のみであり，そしてそれを補う地質や地理情報としては，国土地理院の提供する地理院地図（https://maps.gsi.go.jp/；閲覧日：2024年11月26日），産総研地質調査総合センターの提供する地質図Navi（https://gbank.gsj.jp/geonavi/；閲覧日：2024年11月26日）の利用のみで十分と記されている．

第2章では日本列島の成り立ちについて，日本海成立

前と後に分けて記述している．第３章では，列島の地質に関わる水の果たす重要な役割について述べている．第４章では，日本列島の湿潤な気候に関わる大気循環について，第５章では，海水や塩の起源について解説している．

第６～８章では，伊藤さんの学生時代以来の専門である鉱床学の知識を駆使し，石油・石炭資源，鉄資源，金鉱床について論じており，この列島の資源の豊かさとその資源を育んだ列島の地質の秘密が解説されている．

私から見て，終章の“暮らしの場としての日本列島”の記述が，伊藤さんが読者に伝えたかった重要なメッセージなのだと思う．我々が日本列島で生きるには，様々な天災を覚悟する必要がある．その際，リスクを分散し，先祖から引き継がれてきた暮らしの知恵を駆使することが重要と述べているのであろう．リスクマネージメントの視点からは伊藤さんのご指摘の通り，田中角栄元総理大臣が 1972 年に提唱した日本列島改造論による地方都市への首都機能の分散も実に理にかなった政策案であったのかもしれない．現在では，当時よりもさらに首都圏の一極集中化は進んでおり，地質学者の視点からは，小松左京によって小説として描かれた日本沈没のような日本にとって壊滅的な状況が何時でも起こり得る厳しい状況下にあると断言できる．

ところで，この新書を完読した後も，冒頭で述べたとおり，本書の漠然とした主題である「日本列島はすごい」について著者は何を意図しているのか？と少し考えてみた．伊藤さんも，それについて巻末で少しだけ触れられてはいる．おそらく最高学府の教育者である伊藤さんとしては，“我々日本人は，数奇なめぐりあわせによって誕生した日本列島の上に，激甚の自然災害を乗り越えて何世代にもわたって生活してきた祖先のことを誇りに思うべきである．そして，祖先の見い出してきた列島での暮らしの知恵を謙虚に学び，これからも天災から身を守りながら，資源を活かす暮らしを実践していただきたい．”といった読者に向けた応援メッセージが込められているように思える．それゆえに，私から見て，この新書の内容は，私のようなシニア世代よりも，これから先も日本列島に居住する若い世代の人達，特に高校生から大学生（文系理系を問わず）の皆さまにご一読をお薦めしたい．日本列島の住民として，心が豊かになれる良書と思う．240 ページものページ数でありながら，定価は 1000 円を切っており，これも伊藤さんのお気持ちの表れなのかとも思った次第である．

文　献

七山　太（2015）［書籍紹介］地球全史スーパー年表．清川昌一・伊藤　孝・池原　実・尾上哲治［著］，日本地質学会［監修］，GSJ 地質ニュース，**4**，124–125.

（産総研　地質調査総合センター　地質情報基盤センター／ふじのくに地球環境史ミュージアム　七山　太）